

## 子どもと人権

中 三

最近、ニュースで子どもへの虐待について耳にすることが多くなったと思う。私は特に、就学前の幼児に対する暴力や育児放棄の話を知ると、胸がつぶれるような思いがする。加害者のほとんどは身近にいる大人だ。まだ自分の身の周りのこと、もうまくできない小さな子に、なぜ大人がそんなひどいことをするのだろうか。

私のこの行き場のない感情はどこから出てくるのだろうか。考えると、中学二年生の時の職場体験学習「スリーデイズ」で幼稚園に行ったことが大きかったのだと思う。その時、私は年中四歳児のクラスに入り、三日間担任の先生と共に、子どもたちと遊んだり、運動したりとさまざまな体験をした。最初は、物おじせず好奇心いっぱい目をして全身でぶつかってくる子どもたちにとまどった。

「Aせんせい！」

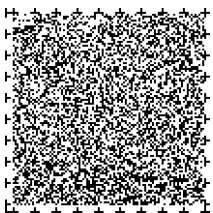
と大きな声で呼びながら私の手をひっぱり、自分たちの世界に連れて行ってはいろいろなことを一緒にやろうと誘ってきた。元気いっぱいの子どもの様子から、徐々にそれは私に対する信頼感の表れなのだと理解できるようになった。

そして、その信頼されているという気持ちは、私に「この子たちを守ってあげなくては」という、今まで思ったことのないほどの強い気持ちを生み出した。この時の気持ちを家に帰って母に話すと、「それって母性本能じゃないの。」

とあっさり言われてしまった。確かにそれもあるかもしれないが、本能だけでは言い表せない何かがあるように思ったのだ。体験学習先の幼稚園は私が卒園した幼稚園でもあり、年長時の担任の先生が今も働いていて、今回私たちの面倒をみてくれた。そのB先生は私たち卒園生の成長した姿を見て、

「あの小さかったあなたたちがこんなに大きくなったなんて、この仕事を続けていて本当に良かった。」

と心から喜んでくれた。そんなB先生を



見た私は、自分の園児時代を思い出し、先生をはじめどんなにたくさんの人にお世話になったか、今に至るまでどれほど周りの人に助けられたかを改めて自覚した。そして、この体験学習で接した子どもたちにとって、私の存在が少しでも良い思い出になって残りますように願った。子どもたちと触れ合った体験学習を通して、自分がどのように成長してきたのかを思い出した。そして、子どもは周りの人に見守られ、助けられて成長していくことを実感したのだった。

幼児が自分ひとりで出来ることは、大人と比べたらまだほんのわずかだ。大人からひどい扱いを受けても反撃することができない。「子どもは世界の宝」と私の祖母がよく口にする。私自身まだ大人ではないが、この言葉の意味をよく考えるようになった。

日本国憲法第十一条にはこうある。

「国民は、すべての基本的人権の享有を妨げられない。この憲法が国民に保障する基本的人権は、侵すことのできない永久の権利として、現在及び将来の国民に与へられる。」

この条文を読むと、人は誰でも人権を持って生まれてくるのだと思う。だが、幼い子どもの人権は本人には守ることができない。幼い子どもの人権を守ることができるのは大人だけだ。

子どもへの虐待。こんな悲しいニュースのない世の中になってほしいと心底願っている。そして、私は幼稚園の子どもたちのきらきらした目を思い出した。強く思うことがある。子どもに信頼される大人になりたい、と。そういう大人になったら子どもを守ろうという自覚ができ、それが、子どもの人権を守ることにつながっていくと私は思う。

